

『無気力の心理学：第四～六章（波多野誼余夫・稲垣佳世子、中公新書、1980年）』

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

効力感とは「自分が努力すれば、環境や自分自身に好ましい変化を生じさせうる、という見通しや自信をもち、しかも生き生きと環境に働きかけ、充実した生活を送っている状態」を指す。筆者は効力がもてるためには、「無力感からの自由以上のものが必要」と言う。具体的には自己選択の機会をもたせること、他者との暖かい交流（協同的学習）、自己向上の実感や本人にとっての価値づけが、効力感にとって重要な意味をもつことを主張しているのである。

本稿では、効力感の形成について3つの観点から考察を加える。1つ目に外的評価による向上心の低下、2つ目に自己選択における選択肢の設定、3つ目に協同学習場面における児童の関係性である。

1つ目の、外的評価による向上心の低下についてである。著者は、ディシやレッパーらの実験結果から、外的な評価や報酬の導入が自律性の感覚を失わせるばかりでなく、向上心をも低下させると指摘する。筆者は、担任する児童が市販テストの発展問題に取り組む姿から、以下のような場面に出会ったことがある。児童Aは、発展問題が外的評価(得点に反映)されないことを知り、「だったら、やろう。」と挑戦したのである。児童Aは、外的評価から解放されたことによって自律性を取り戻し、自らの向上心を掻き立てたのであろう。一方、児童Bは上記の場面で、「じゃあやらない。」と答えた。半強制的に取り組まされ、外的評価を加えられるテストから解放されたにも関わらず、問題に挑戦しなかったのである。これは、外的評価に晒され報酬を与え続けられてきた児童が、その蓄積によって自律性の感覚を失い向上心を低下させて状態であるからだと考えられる。今までも児童Bは、テストで低い得点を取り続けてきた。本人にとって失敗を強く意識する経験の数々が、児童Bの向上心を低下させているのではないか。だとすれば、予習を行い児童に自信をもたせた上で、授業やテストを行えば、その児童も向上心をもって取り組むことができると考える。

2つ目の、自己選択における選択肢の設定についてである。多くの選択肢のなかから、自分で自分の好む活動を選ぶことができる機会をもたせることが、効力感の発達につながっていくだろう(68頁)という著者の考えが示されている。しかし、この場合における著者の想定は、予め用意された選択肢の中から児童が選ぶというものに思えてならない。筆者は選択肢自体を児童が思考し設定することを提案する。それは、我々が育成すべき持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力は、既存の枠の中で納まるものではないからである。新たな枠組みを創りだす、そのことに価値を見出す児童を育てるためにも、選択肢を設定する段階から児童に思考させる必要があると考える。

3つ目の、協同学習場面における児童の関係性についてである。著者は仲間同士の教え合いや、ジョンソンらが提唱する協同的学習における他者との暖かなやりとりを通じて、児童が効力感を高めていくという。しかし、教える側の効力感を高める根拠は書かれているものの、教えられる側の効力感を高める根拠が書かれていない。無批判に教え合いや協同的学習を取り入れることで、教えられる側の役割が固定化し、かえって効力感を低下させる恐れもある。学校現場では、班や小グループによるメンバーが、1か月程度固定されることが多い。教えられる側の児童は、活動を重ねるにつれ、能力による序列を下位に位置付けられてしまう。それらを回避するため、流動的な関係性の構築を目指すべきである。学習活動に応じて、児童に様々な関係性を結ばせるのである。児童の長所を多面的・多角的に見出すことができるため、能力の序列化や役割の固定化を打破することが出来ると考える。

以上、第4-6章の購読を通じて、効力感の形成について3つの観点から考察した。著者が示した考えに加え、筆者が示す3つの観点を意識することで、効力感の形成がより円滑になるのではないだろうか。教育実践を積み重ね、効力感の形成に資するものの正体を、児童の学ぶ姿から探究したい。